

うたかたの記

森鷗外

青空文庫

上

幾頭の獅子ししの挽ひける車の上に、勢いきよく突立ちたる、女神によしんバワ
 リアの像は、先王ルウドキヒ第一世がこの凱旋門がいせんもんに据すゑさせし
 なりといふ。その下もとよりルウドキヒ町を左に折れたる処に、トリ
 エント産の大理石にて築きずきおこしたるおほいへあり。これバワリ
 アの首府に名高き見ものなる美術学校なり。校長ピロツチイが名
 は、をちこちに鳴りひびきて、独逸ドイツの国々はいふもさらなり、新
 希臘ギリシア、伊太利イタリア、璉デンマーク馬などよりも、ここに来きたりつどへる彫ちよう
 工こう、画工数を知らず。日課を畢おへて後のちは、学校の向ひなる、

「カツフェエ・ミネルワ」といふ店に入りて、カッフエー珈琲のみ、酒
くみかはしなどして、おもひおもひの戯たわぶれす。こよひも瓦斯ガス燈の光、
半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさざめく声聞ゆるをり、か
どにきかかりたる二人あり。

先に立ちたるは、かち色の髪かみのそそけたるを厭いとはず、幅広き襟え
飾りかぎ斜なめに結びたるさま、誰たが目にも、ところの美術諸生しよせいと見
ゆるなるべし。立ち住どまりて、後あとなる色黒き小男に向ひ、「ここな
り」といひて、戸口をあけつ。

先づ二人が面おもてを撲うつはたばこの烟けぶりにて、遽にわかに入りたる目には、
中なかなる人をも見わきがたし。日は暮れたれど暑き頃なるに、窓ことごと悉と
くあけ放はなちはせで、かかる烟の中に居るも、習ならいとなりたるなるべ

し。「エキステルならずや、いつの間にか帰りし。」「なほ死な
 でありつるよ。」など口々に呼ぶを聞けば、彼諸生はこの群むれにて、
 馴染なじみあるものならむ。その間、あたりなる客は珍らしげに、後に
 つきて入いりきた来れる男を見つめたり。見つめらるる人は、座客ざかくのな
 めなるを厭いとひてか、暫しばし眉根まゆねに皺しわ寄せたりしが、とばかり思ひか
 へししにや、僅わずかに笑えみを帯びて、一座みやを見度みわたしぬ。

この人は今着きし汽車にて、ドレスデンより来にければ、茶ちやみ
 店せのさまの、かしことここと殊ことなるに目を注ぎぬ。大理石の円まる
 卓づくえ 幾つかあるに、白布しらぬの掛けたるは、夕餉ゆうげ畢りし迹あとをまだ片
 附つけざるならむ。裸なる卓よくに倚れる客の前に据よゑたる土やきの盃さかずき
 あり。盃は円筒形えんとうがたにて、爛徳利かんどくり四つ五つも併おおいせたる大おおいきなる

に、弓なりのとり手つけて、かなふた金蓋をちようつがい蝶番に作りて覆おおひたり。
客なき卓に珈琲碗わん置いたるを見れば、さかしまみな倒に伏せて、いとそこ糸底の
上に砂糖、いくかたまり幾塊か盛れる小皿載せたるもをかし。

客はみなりも言葉もさまざまなれど、髪もけづらず、服も整ととのへ
ぬは一樣なり。されどあながち卑しくも見えぬは、さすが芸術世
界に遊べるからにやあるらむ。中にも際きわ立ちて賑にぎわしきは中央なる
おおづくえ大卓を占めたる一ひとむれ群なり。よそこには男客のみなるに、独ひとりこ
こには少女おとめあり。今エキステルに伴はれて来こし人と目を合はせて、
互に驚おどきたる如ごとし。

来し人はこの群に珍らしき客なればにや。また少女の姿は、初
めて逢あひし人を動かすに余あまりあらむ。前まえ庇び広く飾なき帽ぼうを被かぶ

りて、年は十七、八ばかりと見ゆる顔かんばせ、エヌスの古彫像あざむを欺あざむけり。そのふるまひには自らおのずかけだかか気高き処ありて、かいなでの人と覚えかたりず。エキステルが隣の卓なる一人の肩を拍うちて、何事をか語かたりるたるを呼びて、「こなたには面白き話一つする人なし。この様子にては骨牌カルタののがたまつきたまつき突つきに走るなど、忌いまはしき事を見むも知られず。おん連れの方と共に、こなたへ来たまはずや。」と笑みつつすすす勧すすむる、その声の清きに、いま来し客は耳傾かたぶけつ。

「マリイの君のゐ玉ふ処へ、誰たれか行かざらむ。人々も聞け、けふこの『ミネルワ』の仲間に入れむとて伴ともなひたるは、巨勢君こせとて、遠きやまとの画工なり。」とエキステルに紹介せられて、随したがいい来きぬる男の近寄りて会えしやく釈やくするに、起たちて名告なりなどするは、

とつくにびと
外国人のみ。さらぬは坐したるままにて答ふれど、侮りたるに
もあらず、この仲間の癖くせなるべし。

エキステル、「わがドレスデンなる親族訪ねにゆきしは人々も
知りたり。巨勢君にはかしこなる画堂にて逢ひ、それより交を結
びて、こたび巨勢君、ここなる美術学校に、しばし足を駐とどめむと
て、旅立ち玉ふをり、われも俱ともにかへり路じに上りぬ。」人々は巨
勢に向ひて、はるばる来ぬる人と相識あいしれるよろこびを陳のべ、さて、
「大学にはおん国くに人も、をりをり見ゆれど、美術学校に來たま
ふは、君がはじめなり。けふ着きたまひしことなれば、『ピナコ
テエク』、また美術会の画堂なども、まだ見玉はじ。されどよそ
にて見たまひし処にて、南独逸ドイッの画えを何とか見たまふ。こたび來

たまひし君が目的は奈何^{いかに}。」など口々に問ふ。マリイはおしとどめて、「しばししばし、かく口を揃^{そろ}へて問はるる、巨勢君とやらむの迷惑、人々おもはずや。聞かむとならば、静まりてこそ。」といふを、「さても女主人^{おみなあるじ}の厳しさよ、」と人々笑ふ。巨勢は調子こそ異様^{ことさま}なれ、拙^{つたな}からぬ独逸語にて語りいでぬ。

「わがミュンヘン^こに来しは、このたびを始^{はじめ}とせず。六年前^{むとせ}にここを過ぎて、索^{ザクセン}遜^ンにゆきぬ。そのをりは『ピナコテエク』に懸けたる画を見しのみにて、学校の人々などに、交を結ぶことを得ざりき。そは故郷を出でし時よりの目あてなるドレスデンの画堂へ往^ゆかむと、心のみ急がれしゆゑなり。されど再びここに來て、君らがまとゐに入ることとなりし、その因^{いんねん}縁^んをば、早く當時に結

びぬ。」

「おとなげ
大人気なしといひけたで聞き玉へ。謝肉しやにくの祭、はつる日の事

なりき。『ピナコテエク』の館出やかたでし時は、雪いま晴れて、街ちまたの

中道なかみちなる並木の枝は、一つ一つ薄き氷にてつつまられたるが、今

点ぜし街燈に映じたり。いろいろの異様なる衣ころもを着て、白くまた

黒き百眼ひやくまなこ掛けたる人、群をなして往来ゆききし、ここかしこなる窓

には毛氈もうせん垂れて、物見としたり。カルルの辻つじなる『カツフエエ

・ロリアン』に入りて見れば、おもひおもひの仮装色を争ひ、中

に雑まじりし常の衣もはえある心地こころちす。みなこれ『コロッセウム』、

『中クトリア』などいふ舞踏場のあくを待てるなるべし。」

かく語る処へ、胸当むねあてにつづけたる白前まえだれ垂掛けたる下女はしため、

麦酒ビールの泡だてるを、ゆり越すばかり盛りたる例のおおさかずき大杯を、四つ五つづつ、とり手を寄せてもろ手に握りもち、「新しき樽たるよりとおもひて、遅おそうなりぬ。許したまへ」とことわりて、前なる杯飲みほしたりし人々にわたすを、少女、「ここへ、ここへ」と呼びちかづけて、まだ杯持たぬ巨勢が前にも置かず。巨勢は一口飲みみて語りつづけぬ。

「われも片隅いっとうなる一榻いっとうに腰掛けて、賑はしきさま打見るほどに、門かどの戸あけて入りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利栗イタリア栗うりにて、焼栗盛りたる紙筒かみづつを、堆うずたかく積みし箱かいこみ、『マロオニイ、セニヨレ。』（栗めせ、君）と呼ぶ声も勇ましき、後につきて入りしは、十二、三と見ゆる女おみなこの子なりき。旧ふるびたる鷹匠たかじよ

頭巾うずきん、ふかぶかと被りかぶ、凍えて赤うなりし両手さしのべて、浅あき目籠めごの縁ふちを持ちたり。目籠には、常盤木ときわぎの葉、敷き重ねて、その上に時ならぬ堇花すみれの束を、愛らしく結びたるを載せたり。『フアイルヘン、ゲフェルリヒ』（すみれめせ）と、うなだれたる首こうべを擡もたげもあへでいひし声の清さ、今に忘れず。この童わらべと女の子、道連れとは見えねば、童の入るを待ちて、これをしほに、女の子は来しならむとおもはれぬ。』

「この二人のさまの殊ことなるは、早くわが目を射いき。人を人ともおもはぬ、殆ほとんど憎げなる栗うり、やさしくいとほしげなるすみれうり、いづれも群むれる人の間を分けて、座敷の真中まなか、帳場ちようばの前あたりまで来し頃、そこに休みゐたる大学々生らしき男の連れたる、英イ

ギリスだね
 吉利種のおおいぬ、いままで腹這ひてゐたりしが、身を起して、
 背をくぼめ、四足を伸ばし、栗箱に鼻さし入れつ。それと見て、
 童の払ひのけむとするに、驚きたる狗、あとに附きて来し女の子
 に突当れば、『あなや、』とおびえて、手に持ちし目籠とり落し
 たり。茎に錫紙巻きたる、美しきすみれの花束、きらきらと光
 りて、よもに散りぼふを、好き物得つと彼狗、踏みにじりては、
 へて引きちぎりなどす。ゆかは暖炉の温まりにて解けたる、靴
 の雪にぬれたれば、あたりの人々、かれ笑ひ、これ罵るひまに、
 落花狼藉、なごりなく泥土に委ねたり。栗うりの童は、逸足
 出して逃去り、学生らしき男は、欠びしつつか狗を叱し、女の子は
 呆れて打守りたり。この董花うりの忍びて泣かぬは、うきにな

れて涙の泉涸れたりしか、さらずは驚き惑ひて、一日の生計、これがために已まむとまでは想^{おも}到^{いた}らざりしか。しばしありて、女の子は砕^{くだ}けのこりたる花束二つ三つ、力なげに拾はむとすると、帳場にある女の知らせに、ここの主人出^{あるじ}でぬ。赤がほにて、腹突きいだしたる男の、白き前垂したるなり。太き拳^{こぶし}を腰にあてて、花売りの子を暫^{にら}し睨^{にら}み、『わが店にては、暖簾師^{のれんし}めいたるあきなひ、せさせぬが定^{さだめ}なり。疾^とくゆきぬ。』とわめきぬ。女の子は唯^{ただ}言葉なく出でゆくを、満堂の百^{ひやくまなこ}眼^{ひとしずく}、一滴^{ひとしずく}の涙なく見送りぬ。」

「われは珈琲代の白銅貨を、帳場の石板の上に擲^なげ、外套^{がいたう}取り出でて見しに、花売の子は、ひとりさめさめと泣きてゆくを、

呼べども顧みず。かえり 追付きて、『いかに、善よき子、堇花のしろ取ら
 せむ、』といふを聞きて、始めて仰見あおぎみつ。そのおもての美しさ、
 濃あき藍いいろの目には、そこひ知らぬ憂うれいありて、一たび顧みるとき
 は人の腸はらわたを断たむとす。囊のうちゆう中の『マルク』七つ八つありしを、
 から籠かごの木の葉はの上に置いて与へ、驚きて何ともいはぬひまに、
 立去りしが、その面おもて、その目、いつまでも目に付きて消えず。ド
 レステンにゆきて、画堂かくの額かうつすべき許ゆるしを得て、エヌス、レダ、
 マドンナ、ヘレナ、いづれの図に向ひても、不思議や、すみれ売
 のかほばせ霧きりの如ごとく、われと画額との間に立ちて障しょうげ礙がいをなしつ。
 かくては所詮しよせん、我業わぎの進まむこと覚おぼ束つかなしと、旅店の二階に
 籠こもりて、長椅子ながいすの覆おおい革かわに穴あけむとせし頃もありしが、一い

つちよう

朝 大勇猛心を奮ふるひおこして、わがあらむ限かぎりの力をこめて、こ

の花売の娘の姿を無窮むきゆうに伝へむと思ひたちぬ。さはあれどわが

見し花うりの目、春潮を眺ながむる喜の色あるにあらず、暮雲を送る

夢見心あるにあらず、伊太利古跡イタリアの間に立たせて、あたりに一ひとつ

群れの白鳩しろぼと飛ばせむこと、ふさはしからず。我空想はかの少女おとめ

をラインの岸の巖根いわねにをらせて、手に一ひとつ張の琴を把とらせ、嗚咽おえつ

の声を出いださせむとおもひ定めしたにき。下なる流にはわれ一いち葉ようの舟

を泛うかべて、かなたへむきてもろ手高く挙げ、面おもてにかぎりなき愛を

見せたり。舟のめぐりには数知られぬ、『ニツクセン』、『ニユ

ムフェン』などの形波間なみまより出でて擲や擲ゆす。けふこのミュンヘン

の府ふに来て、しばし美術学校の『アトリエ』借らむとするも、行こ

李りの中、唯この一画いちがこう藁、これをおん身ら師友の間に議はかりて、成しはてむと願ふのみ。」

巨勢はわれ知らず話しいりて、かくいひ畢おわりし時は、モンゴリア形がたの狭き目も光るばかりなりき。「いしくも語りけるかな、」と呼ぶもの二人三人。エキステルは冷淡に笑ひて聞きみたりしが、「汝たちもその図見にゆけ、一週がほどには巨勢君の『アトリエ』ととのふべきに」といひき。マリイは物語の半なかばより色をたがへて、目は巨勢が唇にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯さかずきさへ一たびは震ひたるやうなりき。巨勢は初はじめこのまどるに入りし時、已すでに少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きほれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたずこれなりと思はれぬ。こも例の空

想のしわざなりや否いなや。物語畢りしとき、少女は暫し巨勢を見や
りて、「君はその後のち、再び花うりを見たまはざりしか、」と問ひ
ぬ。巨勢は直ただちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが。「否。花
売を見しその夕ゆうべの汽車にてドレスデンを立ちぬ。されどなめなる
言葉を咎とがめ玉はずばきこえ侍はべらむ。我すみれうりの子にもわが
『ロオレイ』の画えにも、をりをりたがはず見えたまふはおん身
なり。」

この群は声高く笑ひぬ。少女、「さては画額ならぬ我姿と、君
との間にも、その花うりの子立てりと覚えたり。我を誰とかおも
ひ玉ふ。」起ちあがりて、真ま面目じめなりとも戯たわぶなりとも、知られぬ
やうなる声にて。「われはその堇すみれ花うりなり。君が情なさけの報むくいはかく

こそ。「少女は卓越たくごしに伸びあがりて、俯うつむきみたる巨勢かしらが頭を、ひら手にて抑へ、その額ぬかに接吻せつぶんしつ。

この騒さわぎに少女が前まへなりし酒は覆くつがへりて、裳もすそを浸ひたし、卓たの上の上にこぼれたるは、蛇へびの如ごとく這はひて、人々の前まへへ流れよらむとす。巨勢かしらは熱あつき手たな掌ぞこを、両耳りやうじの上の上におぼえ、驚おどろく間まもなく、またこれより熱あつき唇くちびる、額ぬかに触ふれたり。「我友わがともに目を廻まわさせたまふな。」とエキステル呼びぬ。人々は半ば椅子いすより立ちて「いみじき戯たわぶかな、」と一人がいへば、「われらは継子ままこなるぞくやしき、」と外ほかの一人いひて笑わらふを、よそなる卓たよりも、皆興みなきんありげにうち守まもりぬ。少女おんなが側そばに坐ましたりし一人は、「われをもすさめ玉たまはむや、」といひて、右みぎ手てさしのべて少女が腰こしをかき抱かかきつ。少女は「さて

も礼儀知らずの継子どもかな、汝らにふきはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稲妻いなずま出づと思ふばかり、しばし一座を睨にらみつ。巨勢は唯呆あきれに呆れて見ゐたりしが、この時の少女が姿は、董花うりにも似ず、「口オレイ」にも似ず、さながら凱旋門上のバワリアなりと思はれぬ。少女は誰たが飲みほしけむ珈琲碗わんに添たへたりし「コツプ」を取りて、中なる水を口に銜ふくむと見えしが、唯一ひとふき。「継子よ、継子

よ、汝ら誰たれか美術の継子ならざる。フィレンチエ派学ぶはミケランジェロ、中ンチイが幽霊、和蘭オランダ派学ぶはルウベンス、フアン・チイクが幽霊、我国のアルブレヒト・デュウレル学びたりとも、アルブレヒト・デュウレルが幽霊ならぬは稀まれならむ。会堂に掛け

たる『スツヂイ』二つ三つ、値段好く売れたる暁には、われらは七星われらは十傑、われらは十二使徒と擅に見たてしてのわればめ。かかるえり屑にミネルワの唇いかで触れむや。わが冷たき接吻にて、満足せよ。」とぞ叫びける。

噴掛けし霧の下なるこの演説、巨勢は何事とも弁へねど、時の絵画をいやしめたる、諷刺ならむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神バワリアに似たりとおもひし威厳少しもくづれず、言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れたるを取りて、大股にあゆみて出でゆかむとす。

皆すさまじげなる気色して、「狂人」と一人いへば、「近きに報せでは已まじ」と外の一人いふを、戸口にて振りかへりて。

「遺恨に思ふべき事かは、月影にすかして見よ、額に血の迹あとはとどめじ。吹きかけしは水なれば。」

中

あやしき少女おとめの去りてより、ほどなく人々あらけぬ。帰り路かえじにエキステルに問へば、「美術学校にて雛形モザルとなる少女の一人にて、『フロイライン』ハンズルといふものなり。見たまひし如く奇怪なる振舞ふるまいするゆゑ、狂女なりともいひ、また外の雛形娘と違ひて、人に肌見せねば、かたはにやといふもあり。その履歴知るも

のなけれど、教ありて氣象よの常ならず、けが 汗れたる行なおこないければ、美術諸生の仲間には、喜びて友とするもの多し。善よき首こうべなることは見たまふ如し。」と答へぬ。巨勢こせ、「我画かくにもようあるべきものなり。『アトリエ』ととののはむ日には、来こよと伝へたまへ。」エキステル、「心得たり。されど十三の花売娘にはあらず、裸体の研究、危あやうしとはおもはずや。」巨勢、「裸体の雛形せぬ人と君もいひしが。」エキステル、「現げにいはれたり。されど男と接吻したるも、けふ始めて見き。」エキステルがこの言葉に、巨勢は赤うなりしが、街燈暗き「シルレル・モヌメント」のあたりなりしかば、友は見ざりけり。巨勢が「ホテル」の前にて、二人は袂たもとを分ちぬ。

一週ほど後の事なりき。エキステルが周旋にて、美術学校の

「アトリエ」一間を巨勢に借されぬ。南に廊下ありて、北面の壁

は硝子の^{ガラス}大窓に半を占められ、隣の間とのへだてには唯帆木綿^{ほもめん}

の幌^{とぼり}あるのみ。頃はみな月半ばなれど、旅立ちし諸生多く、隣に

人もあらず、業妨^{わざ}ぐべき憂^{うれい}なきを喜びぬ。巨勢は画額^だの架の前に

立ちて、今入りし少女に「口オレライ」の画を指さし示して、

「君に聞かれしはこれなり。面白げに笑ひたはぶれ玉ふときは、

さしもおもはれねど、をりをり君がおも影の、ここなる未成の人

物にいとふさはしきときあり。」

少女は高く笑ひて。「物^{もの}忘^{わす}れたまふな。おん身が『口オレ

ライ』の本^{もと}の雛形、すみれ売の子は我なりとは、先の夜も告げし

ものを。「かくいひしが俄にわかに色を正して。「おん身は我を信じた
まはず、げにそれも無理ならず。世の人は皆我を狂女なりといへ
ば、さおもひたまふならむ。「この声戯たわぶれとは聞えず。

巨勢は半信半疑したりしが、忍びかねて少女にいふ、「余りに
久しくさいなみ玉ふな。今も我が額ぬかに燃ゆるは君が唇なり。はか
なき戯とおもへば、しひて忘れむとせしこと、幾度いくたびか知らねど、
迷まよは遂に晴れず。あはれ君がまことの身の上、苦しからずは聞か
せ玉へ。」

窓まどの下なる小机ここに、いま行李こりより出したる旧ふるき絵入新聞、遣つかひ
さしたる油あぶら氈あぶらの具ぐの錫筒すずづつ、粗末こまつなる烟管キセルにまだ卷烟草まきタバコの端はしの
残れるなど載せたるその片端づえに、巨勢はつら杖づえつきたり。少女は

前なる籐とうの椅子いすに腰かけて、語りいでぬ。

「まづ何事よりか申さむ。この学校にて雛形の鑑札受くるときも、ハンスルといふ名にて通したれど、そは我真まことの名にあらず。父はスタインバハとて、今の国王に愛めでられて、ひと時榮さかえし画工なりき。わが十二の時、王宮の冬園ふゆそのに夜会ありて、二親みな招かれぬ。宴うたげなる頃、国王見えざりければ、人々驚きて、移うつ植しうえし熱帯草そうもく木いやが上に茂れる、硝子屋根ガラスの下、そこかここかと捜しもとめつ。園そのの片隅にはタンダルヂニスきざが刻める、ファウストと少女との名高き石像あり。わが父のそのあたりに来たりし時、胸裂きくるやうなる声して、『助けて、助けて』と叫ぶものあり。声をしるべに、黄金こがねの穹まるてんじよう窿窿おほひたる、『キオスク』(四あ

阿屋すまやの戸口に立寄れば、周囲に茂れる櫻欄しゅろの葉に、瓦斯燈ガスとうの光支へられたるが、濃き五色にて画きし、窓硝子を洩もりてさしこみ、薄暗くあやしげなる影をなしたる裡うちに、一人の女の逃げむとすまふを、ひかへたるは王なり。その女のおもて見し時の、父が心はいかなりけむ。かれは我母なりき。父はあまりの事に、しばしたゆたひしが、『許したまへ、陛下へいか』と叫びて、王を推倒おしたおしつ。そのひまに母は走りのきしが、不意を打たれて倒れし王は、起き上りて父に組付きぬ。肥こえふとりて多力なる国王に、父はいかでか敵し得べき、組敷かれて、側かたわらなりし如露じよろにてしたたか打たれぬ。この事知りて諫いさめし、内閣の秘書官チイグレルは、ノイシユワンスタインなる塔に押籠おしこめらるるはずなりしが、救ふ人ありて助け

られき。われはその夜家にありて、二親の帰るを待ちしに、下はした女め来て父母帰り玉ひぬといふ。喜びて出迎ふれば、父昇かかれて帰り、母は我を抱きて泣きぬ。」

少女は暫しばらく黙しつ。けさより曇りたる空は、雨になりて、をりをり窓を打つ雫しずく、はらはらと音す。巨勢いふ。「王の狂人となりて、スタルンベルヒの湖に近き、ベルヒといふ城に遷うつされ玉ひしことは、きのふ新聞にて読みしが、さてはその頃よりかかる事ありしか。」

少女は語を継つぎて。「王の繁華の地を嫌ひて、鄙ひなに住まひ、昼寝ひるねて夜起きたまふは、久しきほどの事なり。独逸ドイツ、仏蘭西フランスの戦ありし時、加特力派カトリックの国会に打勝ちて、普魯西方プロシヤにつきし、王

が中年のいさをは、次第に暴政の噂うわさに掩おほはれて、公けにこそ言ふものなけれ、陸軍大臣メルリンゲル、大蔵大臣リイデルなど、故なくして死刑に行はれむとしたるを、その筋にて秘めたるは、誰知らぬものなし。王の昼寝し玉ふときは、近きんじゆう衆しりぞみな却けられしが、囁うわごと語ことにマリイといふこと、あまたたびいひたまふを聞きしもありといふ。我母の名もマリイといひき。望なき恋は、王の病を長ぜしにあらずや。母はかほばせ我に似たる処ありて、その美しさは宮の内にて類たぐいなかりきと聞きつ。」

「父は間もなく病みて死まじわりにき。交まじわり広く、もの惜おしみせず、世事には極めて疎うとかりければ、家に遺財ういざいつゆばかりもなし。それよりダハハウエル街の北のはてに、裏屋の二階明きたりしを借りて住みし

が、そこに遷りてより、母も病みぬ。かかる時にうつろふものは、人の心の花なり。数知らぬ苦しき事は、わが穉おきなき心に、早く世の人を憎ましめき。明あくる年の一月、謝肉祭の頃なりき、家財衣類なども売尽して、日々の烟けぶりも立てかぬるやうになりしかば、貧しき子供の群に入りてわれも董花すみれ売ることを覚えつ。母のみまかる前、三日四日のほどを安く送りしは、おん身の賜たまものなりき。」

「母のなきがら片付けなどするとき、世話せしは、一階高くすまひたる裁縫師なり。あはれなる孤みなしごひとり置くべきにあらずとて、迎取られしを喜びしこと、今おもひ出しても口惜くやしきほどなり。裁縫師には、娘二人ありて、いたく物ものごのみして、みづから銜てらふさまなるを見しが、迎取られてより伺うかがへば、夜に入りてしばしば

客あり。酒など飲みて、はては笑ひ罵りののし、また歌ひなどす。客はとつくに外国の人多く、おん国の学生なども見えしやうなりき。或る日あるじ主人われにも新しき衣着きぬよといひしが、そのをりその男の我を見おそて笑ひし顔、何となく怖ろしく、子供心にもうれしとはおもはざりき。午ひるすぎし頃、四十ばかりなる知らぬ人来て、スタルンベルヒの湖水へ往ゆかむといふを、主人も俱ともに勧めすすめき。父の世にありしきとき、伴はれてゆきし嬉しき、なほ忘れざりしかば、しぶしぶうべな諾ひつるを、「かくてこそ善よき子なれ」とみな誉ほめつ。連れなる男は、途みちにてやさしくのみ扱ひて、かしこにては『バワリア』といふ座ザロンドンダムフエル敷船ふねに乗り、食堂にゆきて物食はせつ。酒もすすめぬれど、そは慣れぬものなれば、辞いなみて飲まざりき。ゼエスハウ

プトに船はてしとき、その人はまた小舟を借り、これに乗りて遊
 ばむといふ。暮れゆくそらに心細くなりしわれは、はやかへらむ
 といへど、聴かずして漕出こぎいで、岸边に添ひてゆくほどに、人げ遠
 き葦間あしまにきたりしが、男は舟をそこに停とめつ。わが年はまだ十三に
 て、初はじめは何事ともわきまへざりしが、後のちには男の顔色もかはりて
 おそろしく、われにでもあらで、水に躍おどり入りぬ。暫しありて我
 にかへりしときは、湖水の畔ほとりなる漁師りょうしの家にて、貧しげなる夫
 婦のものに、介抱せられてゐたりき。帰るべき家なしと言張りて、
 ひとひふたひすぐと過うちす中に、漁師夫婦の質朴なるに馴染なじみて、不幸なる
 我身の上を打明けしに、あはれがりて娘として養ひぬ。ハンズル
 といふは、この漁師の名なり。」

「かくて漁師の娘とはなりぬれど、弱き身には舟の權取ることもかなはず、レオニのあたりに、富める英吉利人の住めるに雇はれて、小間使になりぬ。加特力教信ずる養父母は、英吉利人に使はるるを嫌ひぬれど、わが物読むことなど覚えしは、彼家なりし雇女教師の恵なり。女教師は四十余の処女なりしが、家の娘のたかぶりたるよりは、我を愛すること深く、三年がほどに多くもあらぬ教師の蔵書、悉く読みき。ひがよみはさこそ多かりけめ。またふみの種類もまちまちなりき。クニツゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギヨオテ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキヨオオニヒが通俗の文学史を繙き、あるはルウヴル、ドレスデンの画堂の写真絵、繰りひろげて、テエヌが美術論の訳書

をあさりぬ。」

「去年英吉利人一族を率ゐて国に帰りし後は、然るべき家に奉公せばやとおもひしが、身元善からねば、ところの貴族などには使はれず。この学校の或る教師に、端なくも見出されて、雛形勤めしが縁になりて、遂に鑑札受くることとなりしが、われを名高きスタインバハが娘なりとは知る人なし。今は美術家の間に立ちまじりて、唯面白くのみ日を暮せり。されどグスタフ・フライタハはさすがそら言ひひしにあらず。美術家ほど世に行儀悪しきものなければ、独立ちて交るには、しばしも油断すべからず。寄らず、障らぬやうにせばやとおもひて、計らず見玉ふ如き不思議の癖者になりぬ。をりをりは我身、みづからも狂人にはあらず

やと疑ふばかりなり。これにはレオニにて読みしふみも、少し崇すこたたりをなすかとおもへど、もし然さらば世に博士と呼ぶる人は、そもそもいかなる狂人ならむ。われを狂人と罵る美術家ら、おのれらが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂気なくて愜かなはぬことは、ゼネカが論をも、シエエクスピアが言げんをも待またず。見玉へ、我学問の博ひろきを。狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見る、その悲しさ。狂人にならでもよき国王は、狂人になりぬと聞く、それも悲し。悲しきことのみ多ければ、昼は蟬せみと共に泣き、夜は蛙かわずと共に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情つれなくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心のゆくままに語るを咎とがめ玉ふな。ああ、かういふも狂気か。」

下

定^{さだめ}なき空に雨歇^やみて、学校の庭の木立^{こだち}のゆるげるのみ曇りし窓
 の硝子^{ガラス}をとほして見ゆ。少女^{おとめ}が話聞く間、巨勢^{こせ}が胸には、さまざ
 まの感情戦ひたり。或ときはむかし別れし妹に逢^あひたる兄の心と
 なり、或ときは廃園に僵^{たお}れ伏^ふしたるエヌスの像に、独^{ひとり}悩める彫工
 の心となり、或るときはまた艶^{えんによ}女に心動され、われは墮^おちじと
 戒^{しやもん}むる沙門の心ともなりしが、聞きをはりし時は、胸騒ぎ肉顫^{ふる}
 ひて、われにもあらで、少女が前に跪^{ひざまず}かむとしつ。少女はつと立
 ちて「この部屋の暑さよ。はや学校の門もささるる頃なるべきに、

雨も晴れたり。おん身とならば、おそろしきこともなし。共にス
 タルンベルヒへ往ゆき玉はずや。」と側そばなる帽ぼう取りいただて戴きつ。その
 さま巨勢こせが共ともに行くべきを、つゆ疑うたがはずと覺おぼし。巨勢こせは唯母ただに引
 かるる穉おきなご子の如ごとく従したがひゆきぬ。

門前かどまへにて馬車ばしゃ雇やとひて走はらするに、ほどなく停車場ていじやうばに来きぬ。けふ
 は日曜にちようなれど、天氣あま悪わるしければにや、近郷きんごうよりかへる人も多おほか
 らで、ここはいと静しずかなり。新聞しんぶんの号外ごうがい売うる婦人ふじんあり。買かひて見れ
 ば、国王こわうベルヒの城しろに遷うつりて、容よう体たい穩うなれば、侍医じやくいグツデンも
 護衛ごゑいを弛ゆるめさせきとなり。瀛車しんしゃ中ちゆうには湖水こすいの畔ほとりにあつさ避ひくる人
 の、物買ものかひに府ふに出いでし歸かへるさなるが多おほし。王おうの噂うわさいと喧かまびす。

「まだホオヘンシユワンガウの城しろにゐたまひし時には似にず、心鎮しんぢん

まりたるやうなり。ベルヒに遷さるる途中、ゼエスハウプトにて水求めて飲みたまひしが、近きわたりなりし漁師りようしらを見て、やさしく領うなずきなどしたまひぬ。」と訛だみたることばにて語るは、かひもの籠手かごこにさげたる老女おうななりき。

車走ること一時間、スタルンベルヒに着きしは夕ゆうべの五時なり。かちより往ゆきてやうやう一日ほどの処なれど、はやアルペン山の近きを、唯何となく覚えて、このくもらはしき空の気色けしきにも、胸開きて息せらる。車のあちこちと廻まわりこ来し、丘陵たちまちの忽開けたる処に、ひろびろと見ゆるは湖水なり。停車場は西南の隅にありて、東岸なる林木、漁村はゆふ霧に包まれてほのかに認めらるれど、山に近き南の方は一望きはみなし。

案内あない知りたる少女に引かれて、巨勢は右手めてなる石段をのぼりて見るに、ここは「バワリア」の庭ホオフといふ「ホテル」の前にて、屋根なき所に石卓いしづくえ、椅子いすなど並べたるが、けふは雨後なればしめじめと人げ少し。給仕する僕しもべの黒き上衣うわぎに、白の前掛したるが、何事をつぶやきつつも、卓に倒しかけたる椅子を、引起して拭ぬぐひむたり。ふと見れば片側の軒のきにそひて、つた蔓かざらからませたる架たなありて、その下もとなる円卓まるづくえを囲みたるひと群むれの客あり。こはこの「ホテル」に宿りたる人々なるべし。男女打ちまじりたる中に、先の夜「ミネルワ」にて見し人ありしかば、巨勢は往きてものいはむとせしに、少女おしとどめて。「かしこなるは、君の近づきたまふべき群にあらず。われは年若き人と二人にて来たれど、愧は

づべきはかなたにありて、こなたにあらず。彼はわれを知りたれば、見玉へ、久しく座にえ忍びあへで隠るべし。」とばかりありて、彼かの美術諸生は果して起たちて「ホテル」に入りぬ。少女は僕を呼びちかづけて、座敷船はまだ出づべしやと問ふに、僕は飛行く雲を指さして、この覚おぼつか束なきそらあひなれば、最早出もはやいでぎるべしといふ。さらば車にてレオニに行かばやとて言付けぬ。

馬車来ぬれば、二人は乗りぬ。停車場の傍かたえより、東の岸辺を奔はしらす。この時アルペンおろしさと吹来て、湖水のかたに霧立ちこめ、今出でし辺ほとりをふりかへり見るに、次第々々に鼠ねずみいろ色になりて、家の棟むね、木のいただきのみ一きは黒く見えたり。御者ふりかへりて、「雨なり。母衣ほろおお掩ふべきか。」と問ふ。「否いな」と応こたへし

少女は巨勢に向ひて。「ここちよのこの遊あそびや。むかし我命喪うしなはむとせしもこの湖の中なり。我命拾ひしもまたこの湖の中なり。さればいかでとおもふおん身に、真まごころ心打明けてきこえむもここにてこそと思へば、かくは誘さそひまつりぬ。『カツフェエ・ロリアン』にて恥かしき目にあひけるとき、救ひ玉はりし君をまた見むとおもふ心を命にて、幾いくとせ歳をか経にけむ。先の夜『ミネルワ』にておん身が物語聞きしときのうれしき、日頃木のはしなどのやうにおもひし美術諸生の仲間なりければ、人あなづりして不敵ふるまの振舞いせしを、はしたなしとや見玉ひけむ。されど人生いくばくもあらず。うれしとおもふ一いちだんし弾指の間に、口張りあけて笑はずば、後にくやくしくおもふ日あらむ。』かくいひつつ被かぶりし帽を脱棄ぬぎすて

て、こなたへふり向きたる顔は、大理石脈だいりせきみやくに熱血跳おどる如くに
 て、風に吹かるる金髪は、首打こうべ振りて長く嘶いばゆる駿馬しゅんめの鬣たてがみに似
 たりけり。「けふなり。けふなり。きのふありて何かせむ。あす
 も、あさても空むなしき名のみ、あだなる声のみ。」

この時、二点三点、粒つぶふと太き雨は車上の二人が衣きぬを打ちしが、
 瞬またたくひまに繁くなりて、湖上よりの横しぶき、あららかにおとづ
 れ来て、紅べにを潮さしたる少女が片頬かたほおに打ちつくるを、さし覗のぞく巨
 勢が心は、唯そらにのみやなりゆくらむ。少女は伸びあがりて、
 「御者、酒手さかては取らすべし。疾とく駆かれ。一策ひとむち加へよ、今一策。」
 と叫びて、右手めてに巨勢が頸うなじを抱いだき、己おのれは項うなじをそらせて仰視あおぎみた
 り。巨勢は絮わたの如き少女が肩に、我頭かしらを持たせ、ただ夢のこち

してその姿を見たりしが、かのがいせんもん彼凱旋門上の女神バワリアまた胸に
 浮びぬ。

国王の棲すめりといふベルヒ城の下もとに來し頃は、雨いよいよ劇はげし
 くなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の
 豎たてじま縞おり出して、濃こき処には雨白く、淡あわき処には風黒し。御者
 は車を停めて、「しばしがほどなり。余りに濡ぬれて客まろうど人も風や
 引き玉はむ。また旧ふるびたれどもこの車、いたく濡ぬらさば、主人あるじの
 嗔いかりあに逢はむ。」といひて、手早く母衣打うちお掩おひ、また一ひとむち鞭むちあて
 て急いそぎぬ。

雨なほをやみなくふりて、神おどろおどろしく鳴りはじめぬ。
 路みちは林の間に入りて、この国の夏の日はまだ高かるべき頃なるに、

このしたみち
木下道ほの暗うなりぬ。夏の日に蒸されたりし草木の、雨に湿
ひたるかをり車の中に吹入るを、渴したる人の水飲むやうに、二
人は吸ひたり。鳴神なるかみのおとの絶間たえまには、おそろしき天氣あまくに怯れ
たりとも見えぬ「ナハチガル」鳥の、玲瓏れいろうたる声振りたててし
ばなけるは、淋しき路を独ひとりゆく人の、ことさらに歌うたふ類たぐいにや。
この時マリイは諸手もろてを巨勢が項に組合せて、身のおもりを持たせ
かけたりしが、木蔭もを洩る稲妻に照らされたる顔、見合せて笑えみを
含みつ。あはれ二人は我を忘れ、わが乗れる車を忘れ、車の外な
る世界をも忘れたりけむ。

林を出でて、阪路さかみちを下るほどに、風村雲むらくもを払ひさりて、雨
もまた歇やみぬ。湖の上なる霧は、重ねたる布ひとえを一重、二重と剥はぐ

如く、束つかの間に晴れて、西岸なる人家も、また手にとるやうに見ゆ。唯ここかしこなる木下蔭を過すぐるごとに、梢こずえに残る露の風に払はれて落つるを見るのみ。

レオニにて車を下りぬ。左に高く聳そびちたるは、いはゆるロツトマンが岡にて、「湖上第一勝」と題したる石碑せきいの建てる処なり。右に伶人れいじんレオニが開きぬといふ、水に臨のぞめる酒店さかみせあり。巨勢が腕かいなにもろ手からみて、継すがるやうにして歩みし少女は、この店の前に来て岡の方をふりかへりて、「わが雇はれし英吉利人イギリスびとの住みしは、この半腹はんぶくの家なりき。老いたるハンスル夫婦が漁師小屋も、最早百歩がほどなり。われはおん身をかしこへ、伴はむともひて来こしが、胸騒むねさわぎて堪たへがたければ、この店にて憩いこはばや。」

巨勢は現げにもとて、店に入りて夕餉ゆうげつら誂つらふるに、「七時ならでは整はず、まだ三十分待ち給はではかなはじ、」といふ。ここは夏の間のみ客ある処にて、給仕する人もその年々に雇ふなれば、マリイを識しれるもなかりき。

少女はつと立ちて、棧さんばし橋つなに繋つなぎし舟を指さし、「舟漕こぐことを知り玉ふか。」巨勢、「ドレスデンにありし時、公園のカロラ池にて舟漕こぎしことあり、善くすといふにあらねど、君ひと独ひとりわたしむほどの事、いかで做な得えざらむ。」少女、「庭なる椅子いすは濡ぬれたり。さればとて屋根の下は、あまりに暑し。しばし我を載せて漕こぎ玉へ。」

巨勢はぬぎたる夏なつが外套いとうを少女に被きせて小舟おふねに乗らせ、われは

權取りて漕出でぬ。雨は歇みたれど、天なほ曇りたるに、暮色は
 早く岸のあなたに来ぬ。さきの風に揺られたるなごりにや、柵
 敲くほどの波はなほありけり。岸に沿ひてベルヒの方へ漕ぎ戻
 すほどに、レオニの村落果つるあたりに来ぬ。岸辺の木立絶えた
 る処に、真砂路の次第に低くなりて、波打際に長椅子据ゑたる
 見ゆ。蘆の一叢舟に触れて、さわさわと声するをりから、岸辺
 に人の足音して、木の間を出づる姿あり。身の長六尺に近く、黒
 き外套を着て、手にしぼめたる蝙蝠傘を持ちたり。左手に少し
 引きさがりて随ひたるは、鬚も髪も皆雪の如くなる翁なりき。前
 なる人は俯きて歩み来ぬれば、縁広き帽に顔隠れて見えざりしが、
 今木の間を出でて湖水の方に向ひ、しばし立ちとどまりて、片手

に帽をぬぎ持ちて、打ち仰ぎたるを見れば、長き黒髪を、後うしろさまにかきて広き額ぬかを露あらはし、面おもての色灰のごとく蒼あおきに、窪くぼみたる目の光は人を射たり。舟にては巨勢が外套を背に着て、蹲うずくまりゐたるマリイ、これも岸なる人を見ゐたりしが、この時俄にわかに驚きたる如く、「彼は王なり」と叫びて立ちあがりぬ。背なりし外套は落ちたり。帽はさきに脱ぎたるまま、酒店に置きて出でぬれば、乱れたるこがね色の髪は、白き夏なつごろも衣の肩にたをたをとかかりたり。岸に立ちたるは、実に侍医グツデンを引つれて、散歩に出でたる国王なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は恍惚こうこつとして少女の姿を見てありしが、忽たちまち一声「マリイ」と叫び、持ちたる傘投棄てて、岸の浅瀬をわたり来ぬ。少女は「あ」と叫びつつ、そ

のまま氣を喪うしなひて、巨勢が扶たすくる手のまだ及ばぬ間に僵たおれしが、
 傾く舟の一揺りゆらると共に、うつ伏ぶせになりて水に墜おちぬ。湖
 水はこの処ところにて、次第々々に深くなりて、勾こう配ばいゆるやかなりけ
 れば、舟の停とどまりしあたりも、水は五尺に足らざるべし。されど
 岸辺の砂は、やうやう粘土まじりの泥となりたるに、王の足は深
 く陥おちりて、あがき自由ならず。その隙ひまに随したがひたりし翁は、これ
 も傘投捨てて追ひすがり、老いても力や衰へざりけむ、水を蹴けりて
 一ふた足あし三足みあし、王の領えり首くびむづと握りて引戻さむとす。こなたは引
 かれじとするほどに、外套は上衣と共に翁が手に残りぬ。翁はこ
 れをかいやり棄てて、なほも王を引寄せむとするに、王はふりか
 へりて組付き、かれこれたがひに声だに立てず、暫もみあし揉合あひたり。

これ唯一瞬間の事なりき。巨勢は少女が墜つる時、僅に裳を握みしが、少女が蘆間隠れの杣に強く胸を打たれて、沈まむとするを、やうやうに引揚げ、汀の二人が争ふを跡に見て、もと来し方へ漕ぎ返しつ。巨勢は唯奈何にもして少女が命助けむと思ふのみにて、外に及ぶに違あらざりしなり。レオニの酒店の前に来しが、ここへは寄らず、これより百歩がほどなりと聞きし、漁師夫婦が苦屋をさして漕ぎゆくに、日もはや暮れて、岸には「アイヘン」、
「エルレン」などの枝繁りあひ広がりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇にほの見えたり。舟には解けたる髪の水にまみれしに、藻屑かかりて僵れふしたる少女の姿、たれかあはれと見ざらむ。をりしも漕来る舟

に驚きてか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく螢あり。あはれ、こは少女が魂たまのぬけ出でたるにはあらずや。

しばしありて、今まで木影こかげに隠れたる苦屋の燈見えたり。近寄りて、「ハンスルが家はここなりや、」とおとなへば、傾きし簷の端きばの小窓開あきて、白髪おうなの老女、舟をさしのぞきつ。「ことしも水の神にえの贄求めつるよ。主人あるじはベルヒの城へきのふより駆かりとられて、まだ帰らず。手当てあてして見むとおもひ玉はば、こなたへ。」と落付きたる声にていひて、窓の戸ささむとしたりしに、巨勢は声ふりたてて、「水に墜ちたるはマリイなり、そなたのマリイなり、」といふ。老女は聞きも畢おわらず、窓の戸を開け放ちたるままにて、棧橋さんばしの畔ほとりに馳出はせいで、泣く泣く巨勢たすを扶けて、少女を抱きい

れぬ。

入りて見れば、半ば板敷にしたるひと間のみ。今火を点したりと見ゆる小「ランプ」竈かまどの上に微かすかなり。四方よもの壁にゑがきたる粗末なる耶蘇ヤソ一代記の彩色画は、煤すすに包まれておぼろげなり。藁火わら焚びたきなどして介抱しぬれど、少女は蘇よみがえらず。巨勢は老女と屍かばねの傍に夜をとほして、消えて迹あとなきうたかたのうたてき世を啣かこちあかしつ。

時は耶蘇曆千八百八十六年六月十三日の夕ゆうべの七時、バワリア王ルウドキヒ第二世は、湖水おほに溺おぼれて殞そせられしに、年老いたる侍医グツデンこれを救はむとて、共に命を殞おとし、顔に王の爪痕そうこんを留とどめて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌あくる十四日ミュンヘ

ン府の騒動はおほかたならず。街の角々には黒縁取りたる張はり紙みに、この訃音ふいんを書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞号外には、王の屍見出だしつるをりの模様ように、さまざまの臆説おくせつ附けて売るを、人々争ひて買ふ。点呼てんこに応ずる兵卒へいその正服せいふくつけて、黒き毛植けいしょくゑたるバワリアかぶれただ整戴せいだいける、警察吏けいさつしの馬うまに騎のり、または徒立かちだち立たにて馳はせちがひたるなど、雑沓ざつとついはんかたなし。久しく民たみに面おもてを見せたまはざりし国王こわうなれど、さすがにいたましがりて、憂うれいを含こみたる顔かほも街に見ゆ。美術学校びゆつがくにもこの騒さわぎにまぎれて、新あらたに入いりし巨勢こせがゆくへ知れぬを、心に掛かくるものなかりしが、エキステル一人は友の上ともの上を氣きづかひるたり。

六月十五日あしたの朝あした、王ひつぎの柩ひつぎのベルヒ城ベルヒより、真夜中まよなに府うつに遷うつされ

しを迎へて帰りし、美術学校の生徒が「カッフエエ・ミネルワ」に引上げし時、エキステルはもしやと思ひて、巨勢が「アトリエ」に入りて見しに、彼はこの三日がほどに相貌そうぼう変りて、著しるく瘦やせたる如く、「ロオレイ」の図の下にひざまず跪きてぞゐたりける。

国王の横死おうしの噂うわさに掩おおはれて、レオニに近き漁師ハンスルが娘一人、おなじ時に溺れぬといふこと、問ふ人もなくて已やみぬ。

青空文庫情報

底本：「舞姫・うたかたの記 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1981（昭和56）年1月16日初版発行

1999（平成11）年7月15日36刷

底本の親本：「鷗外全集 第二巻」岩波書店

1971（昭和46）年12月初版発行

初出：「柵草紙」

1890（明治23）年8月

入力：よしだひとみ

校正：松永正敏

2000年7月18日公開

2011年8月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うたかたの記

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>